説教20200913フィリピ４：２１‐２３　　　　　242　　231　　390

説教　「パウロ、恐れるな」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

無縁社会という言葉は今の世に生きる私たちが日に日に実感させられている、悲しい現実のように思います。一人一人が孤独感を感じつつ暮らし、いかに努力しても事態が改善しないといった無力感がみんなの間で広がっているように感ぜられます。これは明らかにこの社会の全体的な問題で、みんなが関わっていることだと思われます。

無縁社会という言葉について調べてみましたら、ネットに次のような解説が載っていました。「NHKにより2010年に制作・放送されたテレビ番組による造語である。」ということです。そして10年前にできたこの無縁社会という言葉は、ますますその実態を浮き彫りにしつつあるのではないでしょうか。ここで私たちはあるおそろしい現実に恐れおののくのではないでしょうか。つまり初めに言葉が与えられ、それがますます現実化していっているということです。私たちが耳にする言葉の一つ一つは、このように恐ろしい力をもって私たちに臨み、遂に私たちにはどうすることも出来ない事態を招くというような、いわば人知を越えた力を持っているのです。私たちはどんな言葉であれ、それが私たちの魂に触れ、入り込んでくるとき、その言葉に支配されていくのです。

聖書は言葉そのものですが、具体的にその言葉が何なのかをを言い表している箇所は、何といってもヨハネ福音書の冒頭でしょう。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。」ここで神といわれているのは、主イエス・キリストの父なる神のことで、神すなわち言葉なりと言われています。そして言葉が全てを造られたのです。

如何でしょうか、わたしたちが耳にする言葉の中で、まことに命に満ち、光に満ちているのは神の言葉、すなわち御言葉です。御言葉は人を欺くことがありません。なぜならば、それは逃げも隠れもされないイエスキリストという人によって発せられる言葉だからです。イエス様は今は、姿を隠しておられますが、私たちに絶えることなく御言葉をお話になっておられます。私たちは弱さを抱えた存在ですから、その御言葉を聞き続けることによく疲れてしまうことがあります。姿の見えない人の話を聞くことなんかできないよといって、イエス様から逃げ出したくなる時もあるでしょう。しかし、逃げ出すことは何の得にもなりません。逃げ出したくなる時には、是非お隣の集会室に掲げられている、レンブラントのエマオのキリストの絵画の前で黙想をしてみてください。この絵画は韓国の松岩（しょうがん）教会よりプレゼントされました。この絵画は、逃げ出そうとする私たちを、イエス様が引き留めてくださる、とてもありがたいものです。

さて、今一度、この世を支配する言葉を挙げたいと思います。それは無宗教という言葉です。この無宗教という言葉は明治時代からありましたが、第二次世界大戦後にはますます人口に膾炙して、私たち日本人の属性を形作った言葉ではないでしょうか。

無縁社会といい無宗教といい、無という言葉が気にかかりますが、このような空しい言葉に縛られた今の世の中を、これらの言葉はまさに言い現わしていると思います。

しかし、私たちには今、福音が伝えられ、御言葉を聞くことが出来ます。今の世の虚しさを克服するには、私たちは、御言葉に寄り頼む以外にありません。御言葉を聞かされた私たちは、愛の神によって結び合わされ、全く人知を越えた喜びに入れられます。そこで何が起こっているのか、私たちがはっきりと知り尽くすことはできませんが、とにかくびっくりするような仕方で、御言葉はその喜びを成し遂げて下さるのです。その喜びは後になって、分かるようにされるものです。つまり人知を越えているということは、一つも人間が取り計らっていることではないということです。

さて、今のこの世の中におけることを多少長くお話しましたが、御言葉は、今この世のただ中において働くということを覚えておいていただきたいと思います。

では、今日の聖書箇所に入りますが、では、この当時の世の中はどのようであったのか。そのことを考える糸口が２２節に記されています、「すべての聖なる者たちから、特に皇帝の家の人たちからよろしくとのことです。」これを1955年の口語訳聖書では次のように訳しています。「すべての聖徒たちから、特にカイザルの家の者たちから、よろしく。」カイザルの家の者たち、のカイザルとはローマ皇帝ユリウス・カエサルのことです。カイザルという人名は口語訳聖書では27回も出てまいります。このカイザルという人は、当時の世の中の最重要人物といってよいかもしれません。いえ、人物ではなく彼は神でした。ユリウス・カエサルのユリウスという名前は、ユピテルというローマの神々の最高神の子孫であることを示しています。この神格化された人物が生きた年代は紀元前100年から紀元前44年です。つまりイエス様が地上に来られた１００年前にカエサルは生きていたのです。ですから、ユリウスカエサルというのは最高神ユピテルの子孫ユリウス家のご先祖様カエサルといういわば死んだ神様によって、家族や一族をつないでいくための言葉だったのです。代々のローマ皇帝もカエサルという名前を称号として名乗りました。パウロが会ったとされるローマ皇帝は皇帝ネロだったと考えられますが、そのネロもカエサルと呼ばれたのです。このようにして神ならぬ身の人間たちが、偉大なご先祖様の御威光を誇りつつ自分を誇りつつ、人々を一つにしようとしたのがカエサル信仰でした。

しかしイエス様の有名な御言葉、「それなら、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」は、カエサルが神様ではなくて一人の人間であることをはっきりさせたのではないでしょうか。

イエス様を許そうとするポンテオピラトに対して、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」と叫んだユダヤ人たちには、カエサル信仰が実は偶像崇拝であることが分かっていたのではないでしょうか。

ユリウスカエサルの御威光は当時の絶大な権威でありました。ユリウス1世からユリウス３世迄、それはのちにローマ教皇の名前にもなりました。どんな世の中でも、その渦中に置かれた人間は、一つの形の信仰の中を歩まされるものですが、このローマ帝国の当時において人々の信仰の形がどのようであったか、なかなかはかり知ることは難しいと思われます。私たちの兄弟アウグスティヌスも５世紀に当時を回顧しつつ次のように述べています。

「ローマ帝国という地上の国と神の国の両者は、この世の中にあっては互いに絡み合い、混合しているのである。私が語らなければならないと思うことは、これら二つの国の開始と展開と定められた終末についてである。私は神の助けを受けて、神の国の栄光のためにこれに着手しよう。その栄光は他の神々に仕える国々と対比される時、いっそう輝き渡るであろう[[1]](#footnote-0)」と述べています。

この文章を言い換えれば、次のようになるでしょう。「この地上の国には必ず終わりが来る。しかし神の国には終わりがない。しかも神の国は今この時に、地上の国と絡み合いまじりあいつつ存在している。私たちが神の国の賛美を歌うのは、将にこの現状の地上の国においてであり、今ここにあってこそ、その賛美は喜びに満たされる」という風になるでしょう。神の国と今この地上の国とが絡まり合っているというのは、神の国というのは将にあなた方の間に在るのだということを言い現わしているでしょう。

さてパウロが心を込めて、そして意を決して「すべての聖徒たちから、特にカイザルの家の者たちから、よろしく。」と記したのには万感の思いが込められています。

パウロがその地上生涯の最後の地となったローマでの、牢獄の中で、このフィリピの信徒たちへの手紙は記されたと考えられますが、このローマにパウロは何をしに来たかというと、カイザルの法廷の裁判を受けに来たのです。イスラエルの地で同胞のユダヤ人たちとの間に軋轢が起こって、パウロはローマのカイザルに上訴することにしたのでした。パウロの究極的な主張は、カイザルは人間に過ぎず、人々は死んだ人を神として崇拝しているが、今も生きているイエスキリストこそまことの唯一の神であるということですが、これはまことにただしいことです。そして、この主張をカイザルの法廷に持ち込むというのもまことに正しい手続きなのです。パウロのこの行動を見て、ユダヤ人たちの間では次のように、ささやかれました。「あの人は、カイザルに上訴していなかったら、ゆるされたであろうに」。このような人間的な物言いがあちこちでささやかれたことでしょう。しかしパウロは神からの天使に次のように励まされます。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』

パウロは将にこの地上の国において神の国を歩んでいたといってよいでしょう。互いに絡み合い、混合している地上の国と神の国を渡りあいながらパウロはローマへの旅路を歩ませられます。

そして、ローマで、パウロはカエサルの牢獄に入れられました。又、使徒言行録の最後に次のように記されています。「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」　又、フィリピの信徒たちへの手紙1章13節によりますと

「つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。」

と記されています。

今私たちはこの聖書箇所を読んで、ローマに連行されたパウロが、こんなに自由闊達に振舞い、話し合うことが出来たなんて、とても信じられない～、と思われるかもしれません。しかし、それは今の私たちが思うことであって、実は、パウロも、そして話を聞きに来た人たちも本当に熱くなって、主イエスについて、神の國について語り合ったのではないでしょうか。又、当時の社会もそういった行いを許していたのでしょう。

これらのことが許されましたのは、パウロの行いが御心に適っていたからです。「カイザルは人間に過ぎず、人々は死んだ人を神として崇拝しているが、今も生きているイエスキリストこそまことの唯一の神である」という主張は今の私たちなら何の恐れもなく公言できる言葉でありますが、当時、パウロが其の通り述べたかは分かりませんが、パウロの抱いたその真意は多くの人々を引き寄せ、又、多くの人を主イエスの救いへと導いたことでありましょう。

今日の説教題を「パウロ、恐れるな」としましたが、「恐れるな」というのは私たち一人一人が神の天使から聞いて励まされる御言葉です。今の世の中にはパウロが抱いた恐れとは違った形の恐れが、厳然と存在します。今の日本でカエサルという名前を聞いても恐ろしくもなんともありませんが、私たちは、今の世の現実の恐れに向き合っていかねばなりません。

しかし恐れることはありません、私たちには、私たちを強めてくださる主イエスのおかげで、すべてが可能とされているのです。

お祈りいたします

天におられる私たちの父なる神様、この主日にこの兄弟姉妹を集められ共に礼拝賛美出来ますことに感謝致します。

あなたは猛暑の時を過ぎ去らせ、私たちに穏やかな季節をあたえてくださいました。子供たちは学びの場所に、向かっています。どうか私たちが心をしずかに、あなたに向けて、騒ぐことなく、真理と愛を悟ることができるようにして下さい。今、国家の新たな首相が選ばれ様としていますが、あなたが全ての議員の心を治め、その計るところを、主の御心にかなわせ、人々にまことの平安と福祉とをお与えください。

この教会に来れないでおられる方々を覚えます。どうか私たちが聖霊の親しき交わりにいれられ、会うことできない方々のことを覚え祈り続けることが出来るように、私たちを整え導いてください。

私たちを日々新たに生まれさせ、あなたの変わらない愛をもって私たちを奮い立たせてください。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。

1. アウグスティヌス『神の国⑴』ｐ.96 [↑](#footnote-ref-0)